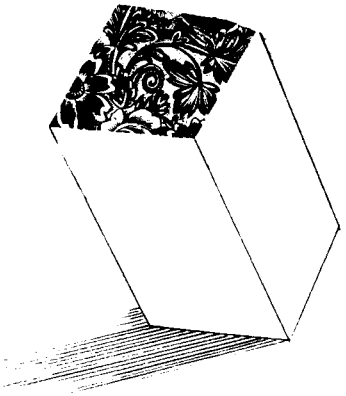
芹澤光治良作品集

第八卷

ブルジョア
落葉の声

芹澤光治良



新潮社版

ブルジョア・落葉の声　〈芹澤光治良作品集 8〉

昭和49年9月10日　印刷
昭和49年9月15日　発行

定価800円

著者　芹澤光治良
発行者　佐藤亮一

発行所　株式会社 新潮社
東京都新宿区矢来町71
電話　業務部 (03) 266-5111
編集部 (03) 266-5411
郵便番号 162　振替 東京808

印刷所　大日本印刷株式会社
製本所　新宿加藤製本株式会社

© Kojiro Serizawa 1974 Printed in Japan
乱丁・落丁本は，御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

目次

ブルジョア　5
大佐と少佐　45
鈴の音　53
鎮魂歌　59
歴史物語　83
秘蹟　103
ピッコロ　133

昼火事 149
候補者の妻 163
落葉の声 177
死の影 201
おかしな結婚 215
ボストンバッグ 229
非現象の世界 245
死者との対話 259
秋扇 275

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

芹澤光治良作品集　第8巻

装画　司　修

ブルジョア

これも崩滅する階級の一態である。

1

租税の大半を、軍備に奪われない国民は、仕合せである。

「スイスは夢の国です」

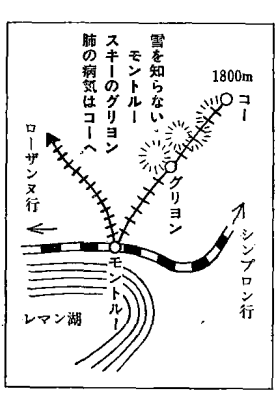
「この世の天国です」

この言葉は、肺結核の夫の転地に従って、パリを去る時には、フランス人に独特なお世辞だった。山、湖、空、光、色、総て、スイスに来てからは天国のものだった。しかしフランス人達の聞かせてくれた言葉が単なる慰安でもなく、景色について言ったことでもないと、一年暮して、ようやく沢夫人には解って来た。

海洋に浮べる艦の代りに、雲を凌ぐ山々にまで軌道を敷いている。兵営内で空しく消耗される若い生産力は、アルプスに自動車用のアスファルト道を拓くに費う方がましである。人を殺すことに専心するよりも、単なる娯楽であり、贅沢に終るものでも、人間生活を豊かにしようと努力することが、どんなに良いことか、夫人はぼんやりと、戦争を心配せずにいられる国の幸福を、日常生活のどんな場合にも知らされる。

雪になりそうなので、急いで買物をまとめてから、普段のように駅前の、レストラン・モン・ブランで、登山電車を待った。軒下の歩道の椅子に掛けたが、ストーブに寄らなくとも寒くはなかった。そこから仰げば、夫の待っているコーは、千八百メートルで、雲にかくれているが、下のグリヨンの別荘は、雪の中に点々と見える。レマン湖畔から絶壁のようなその山頂に、一直線に登る軌道を眺めると、山と闘うこの国民の歴史が、最近読んだばかりなので、一層偲ばれる。

こんな地図が、レストランの壁にかかっている。



「結核都市コー、全快率八十三パーセント」
「肺を病む者は山岳へ行け」
「来る十二月一日、グリヨンに於ける国際スキー大会」

こうしたポスターが、停留所の前で、低い空に圧えられている。絵ハガキ屋のキオスクの下に小馬が頸を垂れて、鞭を挙げている老人と、古い車と一緒に、誤ってこんな所に下車するお客を待っている。「紫の恋」と赤く染めた本屋の横に、レマン湖が黒くはみ出て、シヨン獄城のドームの腹を半分のぞかせている。

冬の避暑地は頼りない。夫人はチョコレートの上に張る皮のことも気にかけずに電車を待った。

午後の二時はスキー客を山に連れて行かない。上等車には四十位の紳士が一人いた。よく山で会うが、まだ挨拶したこともない。彼が病人の家族であることは、初めて会った時に感じた。夫人は電車で会う人を皆、病人、病人の家族、全く肺病に関係ない者、と識別する感覚を持っていた。そして胸の病気に関係ある人には、親しみに似た気持を抱く。空いた車を選んで、紳士の隣席を取ったが、彼も夫人に目礼した。

車がよじれば、上には風がある。山を包む雲は霧だ。雲を分け入ればやがて霧は小雪となっている。雪を風に投げつけられながら進む車体は、急な傾斜だ。夫人は読みかけの日本書を止めて、鉄柵を握った。しかし隣から寄りかかって来る紳士の体は重い。その重みは自然の力だけのものではなかったが、夫人は黙って、落葉松の黒い幹にからみかかる小雪を窓越しに見ていた。

「ごめん下さい」

思い切って、フランス語で放って、夫人は体をよけた。

「大変な雪になりまして、これではコーは大変でしょうな」

同じ言葉で自然に答える彼は、夫人の意味が解らないような眼を向けた。夫人はそのアクセントで、彼がフランス人であることが解ったが、その眼にフランス人独特の温良さが読めた。夫人はわけもなく赤くなって黙っていた。次の勾配で再び重い紳士の肉体が、ずれ下って小さい軀に支えられるようになったが、夫人は、緊張して無理に抵抗することを止めて、その頑丈なからだを頼もしく見た。

「貴方は『エスポアール（希望）』にいられる日本人でしょう？」

「ご主人の病気はどうです。遠く外国で病気しては大変でしょう。ご同情します」

「三年もパリでお暮しですか。やはりパリの空気がいけな

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

かったのですね」

このくらいの親切は、どんなフランス人の口からも出るのであるが、それが夫人には初めて聞く慰めの言葉に感じられた。

「奥さまがお悪いのですか。グランドテルの浴光療法というのは、本当に成績が良いのでしょうか？」

頼れる者のように、こんな質問をするまでに、夫人は打ちとけて話し合って、グリヨンを過ぎて、コーに近くなったのも気付かなかった。

手提げの中から雪靴を出して、積雪が一メートルもある道を、療養所に辿る用意をした。彼は夫人の買物をさげて、「希望」の岐れ路まで送ってくれた。夫人は手袋を通して暖かな握手や、眼に読める愛情を嬉しいことに感じて、「希望」に帰った。

「希望」は雪の中の宮殿だ。

死の宣言を受けて、欧州各地から集まる肺結核患者は、この宮殿の門に金文字に輝く希望を、第一に捕えなくてはならない。南向きに、太陽と空気とを十分に受けられるように、四百の部屋が、上下左右に重なりあって、死の応接間を作り、そのどれもが物語の主人公を容れている。誰でもその一人を語れば、ジードの傑作となり、ケッセルの「捕われた人」となる。我々の沢夫妻も、この四階百二十一、二十二号にいるのである。各部屋に、キュールと言って、ベランダに似た部屋が付属して、其処に寝椅子を出し病人は終日外気を呼吸する。（この外気の中に横臥する療法を又キュールと言うが）

沢は毛布に包まれて、頸を出して寝ていたが、登山電車の音を聞いて、胸近くまで積った粉雪を払って起き上った。もう間もなく四時なので、その日の午後のキュールも終ろうとしていた。

「私、とうとうフォーコンネさんと話してしまったわ」

夫人は転げ込むように入って来て、車の中で会った彼のことを、先ず話した。二人は散歩の途中何度も会って、ソルボンヌ大学教授に似ている彼をそう呼んでいるのである。

「私達のことを、それはよく知っているので驚いてしまった……」

外套や帽子を脱ぎながら、夫人は彼のことを続けた。

「奥さんが悪いんですって、やはり。グランドテルの浴光療法は、咽喉と腸の結核には驚く程良いが、肺には却ってよくないとか言ってましたわ……

貴方、何か慍っているの。黙りこくって。キュールの時間は終ったでしょう？」

キュールと部屋との会話が、たとえ四時を過ぎても、他の患者のキュールを妨げそうな気もし、かとて、部屋に入

ってしまうのは早いので、沢は聞き手になっていた。一カ月一回、銀行に下りて行く妻は、色々麓のモントルーで見たことを、細大漏らさず、本屋のショーウィンドーの中から、レストラン・モン・ブランのお客の数まで、話すのが常であり、そうして聞いていることが、沢にも楽しいことである。

夫人はキュールの夫の横の椅子に掛けたが、その時、健康なフランス人に無関心でおれない自分を、覗いたような気もして、話題をそのまま追えなかった。

「熱はなかった？」

「六度七分（平温）。お前、キュールでそんな薄衣でいては大変だよ」

キュールは零下十度。病む肺臓に凍った空気は良くても、外套のない夫人の肌には厳し過ぎる。しかし夫人の心は急に曇って、脚下に蹴える雲の波を、ぼんやりと渡って行った。

午後のキュールの安静時間が過ぎて、「希望」には生気が走った。上の百七十号からは、単調な手風琴の嘆きが、隣の百二十号からは、私語を伴うすすり泣きが、沢夫人の胸を撫でる。ラジオの音、蓄音機のジャズ、スキーへの誘い合い、叫び、夫人はどうかしたくて、どうにもならなかった。自然にもり上る泪を、腹立たしくて耐えようとするが、力のないおなかの置き処がなかった。

「私、近頃よほど、どうかしてしまった」

そう言い残して部屋に去った。

スイスは要塞の代りに、結核都市を建設して、文明病と闘う多くの軍人——医師——を養成している。レーザン、ダボス、コーの名は、ベルダンの名の如く欧州人には、知れ渡っている。

兵営が生命である田舎町、コーもそれだ。毎年各地から集まる若者、それが結核菌の培養者であり、闘病的訓練をすることが違うだけである。五大私設サナトリウム、七大公設療養所、無数のホテルと貸別荘、そこに六千人ばかりの患者が滞在している。そして各派の教会は、墓場を開いて落伍者を待つ。

沢夫人は、グランドテルの横から、カトリック教会前の坂を降りて、商業区に出ようとしている。夫は雪がちらつくからと一緒に出なかったが、その雪も止み、下の雲の波から、グリヨンの屋根や、湖の断片が飛び出して来た。

「一緒に来ればよかった」

モントルーに行ってから五日、吹雪は昼夜療養所を廻った。病人も看護人も、冬の宮殿を散歩するので諦めていた。その間に沢は、長く躊躇っていたプヌモと言う外科的療治

法を始めた。悪い左肺の胸壁と肺臓の間に、空気を送って、肺臓の活動を弱め、これに依って病菌を絶やそうとした。二回だけで熱も下り、気持よくなったと言うが、長く看病してこの病気の根強さを知っているので、この坂道を登る疲労の程度を見たくなった。

山に来て一年、徐々に恢復することは、医者の説明、熱の赤線の下降、体重表の上向きなどよりも、坂道の苦痛の度で最も易く計られる。

教会前の坂を登るに、一年前には杖を持って五回休んだ。四回、三回、二回となるに従い、スイスを去って、パリへ、そして日本へ帰る日が近づくと、夫人は待った。緩り登れば、一回で足りるようになったのは一カ月前、その時から、休まず登れたらということが、夫人の欲となり願いとなった。

プヌモは、現代の医術でなし得る最も有効な肺病療法であることを思い、その上二回とも希望の空気量を送射し得たことを考えると、この坂を杖なしに登る日も近いであろうと、想像しながら、薬屋の横から花屋の前を曲ろうとした。その時、花屋から突然健康な紳士が飛び出して、夫人に突き当った。二人は無器用に立ち止り、驚いたように手を出した。夫人は握られた手を引っ込めると、黙って並んで歩き出した。

「あの花屋の主人は、『希望』にも行くでしょう。有名なパリのオペラのバスの歌手でしたが、戦争中に毒ガスで咽喉をやられ、声が出なくなったのです。毎日蓄音機で自分の声を偲んでいます」

「そらこの写真機屋も、毒ガス組です。細君と一緒にフランスから来ましたが、看護中に細君がやられ、さんざん虐待して、半年ばかり前に死んでしまいましたが、先生近頃、毎朝、日課のように墓詣りしていますよ」

「プヌモは本当に良い療法ですの？」

夫人はこのフランス人にもそれを問いたかった。

「片方の病人には、九十パーセントの全快率を示していますよ。空気さえ入って行けば成功です」

「でも、その肺臓は機能を失うそうですね」

「肺は一方の四分の一あれば、生きて行けますよ」

彼は色々の例を引いて夫人を励ました。その言葉は嘘ではない。プヌモさえ成功すれば——、これこそ総ての患者の唯一の願いであり、プヌモの成功、不成功が、生死の分岐点である。

彼はその妻が、プヌモを行なったが、昔肋膜をしたためであろう、空気が胸部に入らないで、止むなく、フレニコと言って、頸筋を切り、横隔膜を上げて、病肺の活動を弱めようとする手術を、行わねばならないとも話した。どん

なに愛し合っているか、どんなことをしても助けねばならないことなども話した。

「私達は結婚して七年、子供も、親も友もいらず、唯二人で充ち足りていました。幸福はそのまま円く転げて行くものと信じておりましたのに。私は仕事もなげて、ニーム（南仏の古都）を棄てて来ましたが、いつになったら帰れますか」

二人は自然に街を出て、落葉松の林の中の広い路に出ていた。アルプスはレマン湖を越えて、白い空に薄く滲んで見える。夫人は白い外套を、重そうにして、何度もつまずき支えられ、優しい男の愛撫に、恋を囁かれるような思いで、その男の妻に対する愛を聞いた。林を抜けると、公衆病院の患者に踏みかためられた雪道に出たが、柔らかく膝を没することもあって、その度に、夫人は男の腕に縋と摑まえられた。このまま黙って道を辿るのに不安を感じなかったが、二人は「悪魔の穴」から、アルプスに背を向けて引き返した。

病人は窓を開け放って眠る。外気はキュールを越えて部屋を凍らせ、スチームの管をも氷にする時がある。昼から晴れたその夜は、月が雪を滑って部屋にも流れ込んだ。毛布で包んだ軀を寝台の上に起すと、広い窓が澄んだ空を額縁に張っている。物の凍る音が響く。こんな夜、沢は眠れないが、薬で眠りを招かず、物思いに頭を委せておく。こんな風にしていつしか眠ったものであろう、突然物音に覚めた。部屋は浴室を中にして妻のと通じているが、人の気配がするので上半身を起すと、浴室の戸を背に、パジャマの妻が立っていた。

「どうかしたの？」

沢の言葉は冷たかった。眠りを破られる翌日の疲労が、直ちに計算されるのである。妻は黙ったままつくづく夫を眺めている。夫の腕に抱かれたかった。優しい言葉が聞きたかった。

「今何時？」

その夫の心が解ると、むやみに腹が立った。耐えられない怒りが心臓で唸った。一言でも口を開けば、怒りが燃え出しそうになった。

「寒いし早くお休み」

夫人はすうと消えた。

これは一瞬間に終った出来事で、沢は悪夢に襲われたのではないかと思った。病気以来、沢夫妻は兄妹の生活をした。力を闘病に備えるために、あらゆるものが犠牲になった。生きようと念う故に、妻を妹と見るのに、苦痛も不自然も感じなかった。それに妻から、——子供までパリに残して来て看護に骨を砕く妻から、誘惑さえ感じなかった。

妻は妻で妹となり切っていた。それだものを、その夜のことも、弱った身体の錯覚だと思いなしてしまった。

沢夫人はキリスト教徒ではないが、日曜日のミサには、よくカトリック教会に出かけた。祈りたいというよりも、健康な雰囲気が欲しかった。大オルガンの音も、合唱も、元気な説教も、皆病気から縁が遠かった。結婚の鐘が鳴ればいつも、スポーツに出掛けるように教会に来た。

午後のミサが終って、教会を出て来ると、四十か五十か年齢のよく判断のつかない婦人が、直ぐ後を追って来た。黒い着物に黒い帽子、しかも型は戦前のもので、お伽噺の魔法使いの媼さんに似て、黒い鋭角の目を放さない。

「私に従いなさい」

沢夫人の横から、だしぬけに威厳をもった調子で言う。教会前は一本道で、その命令に従うより外はない。薬屋の曲り角で媼さんは、夫人の選ぶべき道を取った。雑貨商の前を右にすれば、「希望」に一本道であるのに、フラフラと左に従ってしまった。真直ぐに再び左に下れば、一団の商業区だ。兵隊さんが日曜日一日、兵営内の憂さをはらす区が、兵営から近くなく遠くない処にあるものだ。

「奥さん、貴方の求めるものを知っています」

その言葉は魔法のように夫人の軀を慄わせた。

「沢山です」

夫人は一目散に来た道を帰った。息もつけず滑る雪靴に力して、ステッキを折ってしまった。走った。漸く四辻に着いて見ると、一間と離れぬ所にその老婆は立っていた。

「うせろー」

夫人は叫んだ。

「奥さん、貴方が何を求めているか知っていますよ。ご用の時は教会で待っています」

この台詞を後ろに聞きながら夫人は息を切らした。

午後二時から四時までは結核都市に独特な二時間だ。患者は例外なしにサナ（サナトリウム）、ホテル、別荘のキュールに出て、寝椅子で絶対安静の闘病だ。読むべからず、書くなかれ、物を思わず、口を開かず、見ず――これこそ軍隊式な規則だ。療養所はエレベーターもとまり、一切の音響を殺す。街では自動車もガレージにおさめ、静粛を守る。皆六千人の命懸けの真剣勝負を援けるのである。従って、沢夫人が老婆に捕まった時には、散歩の人もなく（この時刻に出歩ける人は健康者だけだが）、街は雪にまどろんでいた。

「希望」に転げ込んだ時は、四時過ぎて活気づき、エレベーター前の広間には、数人の患者がラジオをかこんで、ミラノを聞こうか、ウィーンか、パリか争っていた。その

横には既にトランプに賭けている一団があった。
「私もう教会に行くのは止めにしますわ」
キュールで読書している夫に言った。
「帰りにこちらに登って来るのが、私一人でしょう、寂しいったらないのよ」
上のキュールからは、手風琴の音が、迫るようにする。
「厭ね、又あの音。部屋を変りましょうか。毎日で助かりませんもの」
「少し根気負けがするな。今日はキュールの間も止めないんで、とうとう苦情が出てしまった」
「医局の方でどうして黙っているんでしょう」
「神経衰弱で、止めさせたら熱が昇るし……それに病気もよくないらしいから」
「イタリアに帰りたいんでしょうね」
「碧い海が見たいと泣くのだそうだ」
「ああ、私も日本を見たいわ。子供も……」
夫人は余り不幸過ぎる自分が悲しくなった。
「子供の処へ電話を掛けて元気をお出し」
やっと歩けた女の子、託児所の赤ん坊達、日本の家庭、今日会った老婆……熱い目を閉じても映る。沢も黙って、本を閉じ、同じようにキュールの長椅子にかけた妻を見ていた。突然上から叫び声がして、二人は椅子に起き上った。風琴の音はなかった。廊下を走る音、階段を下りる音、エレベーターを呼ぶ鈴、「希望」は火事場のようになった。沢夫妻は黙って顔を見合せたが、直ぐに風琴のイタリア人が身投げしたことを知ったけれど、立ち上りも、口を開きもしなかった。
死人は夜明け前に山を下りて行く。残る人々に悪い影響を与えない注意だ。イタリア人が外科室に運ばれてから、その後の経過は知る人もなく、知ろうとする者もなかった。が、風琴の音は、多くの人々の心に虚空を掘って行った。そして雪の日が続いた。
沢夫人はそれでも出掛けなくてはならなかった。フランス語の勉強、裁縫の稽古……夕べが早く、三時には粉雪が、道路の電燈に映る。そして、会う婦人の服装が皆黒く見える。
「貴方の求めていることを知っていますよ」
どの婦人からも言われそうな気がした。急いでも雪道は遠く、杖を二本持ってさえ出て歩いた。
そんな時、例のフランス人に出会うのは嬉しかった。識らずに元気になる。毎日会いそうな希望を持って外出し、会えば輝かしい気分を沢にも贈した。
「あの人の奥さんは可哀想ね。手術したが、左肺には心臓の重みが加わるので、予期した程横隔膜が昇って来ないのですって。それで、トラリコと言って、左の肋骨を切り取

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c